

社会福祉法人・学校法人 イエス団



イエス団報

Jesus band news

2024/12/24

29

再刊 29号

- わたしたちは平和をつくりだす
～宮古島研修に参加して～ 山下茂雄
- 人物探訪 祐村明さん
- 研修報告
- トピックス
くじらぐも 移転しました
- 施設紹介
瞳保育所
港島児童館
- イエス団の輪っ
神崎清一さん（理事長）
総谷亜弓さん（ガーデンエル）
大角知香さん（杉の子保育園）
松本真理子さん（光の子保育園）
中川智貴さん（野の百合保育園）
- 表紙写真の解説
- 新施設長就任紹介
- 編集後記

発行：2024年12月24日

発行者：神崎 清一

編集・発行：

社会福祉法人・学校法人 イエス団

〒651-0076

兵庫県神戸市中央区吾妻通 5-2-20

TEL：078-221-9565

FAX：078-221-9566

https://jesusband.jp.

mail to: honbu@jesusband.jp



ミッションステートメント2009

わたしたちイエス団の実践は、
1909年12月24日の賀川豊彦の献身に始まる。
そして、イエスの愛に倣い、互いに仕えあい、
社会悪と闘い、新しい社会を目指して
多くの協働者とともに今日まで歩み続けてきた。
この歴史を検証し、働きを引き継ぎ、
今、わたしたちはイエスに倣って生きる。

わたしたちは、いのちが大切にされる 社会をつくりだす
わたしたちは、隣り人と共に生きる 社会をつくりだす
わたしたちは、違いを認め合える 社会をつくりだす
わたしたちは、自然が大切にされる 社会をつくりだす
わたしたちは、平和をつくりだす

2009年12月24日

わたしたちは

平和をつくりだす

～宮古島研修に参加して～

神愛館 館長
山下茂雄

この秋（10月21日（月）～23日（水））日本キリスト教保育所同盟（以下：キ保同）主催の“宮古島研修”に参加しました。研修の一端をご報告し、ミッションステートメント2009にある「わたしたちは、平和をつくりだす」という宣言文に思いを馳せたいと思います。



出典：沖縄県公式ホームページより

九州南部から台湾まで、南西方向に1200 kmにわたって島々が連なる地域は“琉球弧（りゅうきゅうこ）”【南西諸島】と呼ばれています。この“琉球弧”には、七つの島【馬毛島（まげしま）、奄美大島（あまみおおしま）、徳之島（とくのしま）、沖縄島（おきなわじま）、宮古島（みやこじま）、石垣島（いしがきじま）、与那国島（よなぐにじま）】があり、2016年3月に与那国島に陸上自衛隊のレーダー基地が開設されて以来、2019年3月に奄美大島と宮古島、2023年3月に石垣島ミサイル基地が開設されました。また2024年4月には沖縄島に地対艦ミサイル部隊が配備され、今後馬毛島に米軍空母艦載機の離着陸訓練場などが開設される予定です。その他、国は様々な“台湾有事に備えた”新たな防衛拠点づくりを計画しています。こうした急速な“防衛力強化”の中、今「琉球弧を戦場にするな」との声が大きく広がっています。

宮古島では、2019年3月に陸上自衛隊宮古島駐屯地が開設され、警備部隊（約38人）が配置され、2020年3月には地対空ミサイル部隊（約180人）、地対艦ミサイル部隊（約60人）、警備部隊の増員（約100人）がなされています。また2021年4月には保良（ぼら）訓練場

が開設、ミサイル弾薬庫、射撃訓練場が増強されています。更に、これから電子線部隊（約50名）配備される予定です。

こうした中、「みやこ九条の会」「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会（以下「連絡会」）」などの人たちは、「やがて宮古島が“戦場に”なりかねない」と反対の声を大きくあげ続けてこられました。研修ではこれらの方々から平和への篤い思いと島の現状についてうかがうとともに、実際に島をガイドしていただきました。

初日21日午後は、宮古島伝道所を会場に「宮古九条の会」事務局の上里清美（うえざとときよみ）さんが、宮古島の歴史、文化そして自衛隊駐屯地開設以降の島民の生活の変化も含め島の状況とこれまでの活動についてお話をされました。

上里さんの「運動の成果の小ささに無力感を覚える時もあるが、“平和でどのかな島をこどもたちの未来に残したい”という思いのゆえに戦い続けている」とおっしゃった言葉が印象的でした。

私たちは沖縄島での長い平和運動の一端を知らされています。「平和な島をこどもたちの未来に残したい」との思いは、これまで、そして今、平和運動を続けてこられている方々の共通の思いではないかと思います。

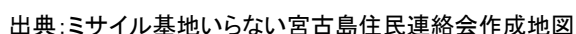
沖縄の人たちは「戦争になると軍隊は国民を守らない」と言います。それだけではなく、味方である日本軍によっても生命の危険にさらされる。これは、住人を巻き込んだ激しい地上戦が続き、多大な犠牲（県民の4人に1人、約12万2千人以上）を強いられた、先の沖縄戦の経験から得た悲痛な“経験知”です。そしてこれは“真実”だと思うのです。だからもう二度と沖縄を戦場にはならない。このままでは“アメリカの戦争”に巻き込まれ、また大きな犠牲を強いられ、“平和な島をこどもたちに残せない”特にこの思いが彼ら・彼女らの平和運動を根底から支えている一つの軸だと思います。

私たちはどうでしょうか。“こどもたちの未来”にどんな社会を残すのでしょうか。

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師（1929-1968）は、1963年ワシントン大行進の最中20万以上の参加者たちの前で「私には夢がある（I Have a Dream）」と力強く語りかけました。私たちにも“夢”があるのではないのでしょうか。そういう意味では、「わたしたちは、平和をつくりだす」という私たちの宣言は、“次の世代にどのような社会を残すのか”という私たち一人ひとりへの問いかけでもあると思います。そうであれば、私たちは、この問いにどう応えていくのでしょうか。ささやかでも自分なりに「平和をつくりだす」歩みへと導かれたいと願わずにはおれません。

二日目は、“連絡会”共同代表の清水早子（しみずはやこ）さんの案内で、陸上自衛隊宮古島駐屯地及び近くにある最新鋭のレーザー施設をはじめ、下地島（しもじじま）空港、長山港（海上保安庁巡視船基地）、野原（のぼる）

そしてこの表題通り島のいたるところに“軍事防衛施設”が点在しており、島をめぐる際のマイクロバスからの頻繁な乗り降りに“軍事要塞”としての宮古島を体感しました。



「わたしたちは、平和をつくりだす」。この宣言が、自らの人生のそれとなるようにと願ってやみません。

人物探訪

元杉の子保育園園長 祐村 明さん

祐村 明

ゆうむら あきら

1942 年神戸市生まれ

仏教大学社会学部児童福祉学科卒

1966 年 4 月（福）イエス団就職

賀川記念館～杉の子保育園

1986 年～2008 年 イエス団評議員・理事



イエス団報では、賀川豊彦先生のキリスト精神を継承された先達の方々を紹介してまいりましたが、賀川先生の生前の姿をご存知の方が圧倒的に少なくなってまいりました。これまで掲載されていた方は賀川先生を知っている第一世代の方々と、今回は第二世代といいたうか、賀川記念館副館長や杉の子保育園園長などを務められた祐村明さんにお話を伺いました。祐村明さんのライフヒストリーを通して、賀川先生のこと、賀川記念館・杉の子保育園のことなど、貴重なエピソードをたくさん聞かせていただきましたのでご覧ください。

生まれ

1942 年 10 月、神戸の二宮に生まれました。父は大阪の出身で、姉、3 人の男兄弟と妹がいました。ただ、戦争が激しくなると、実家を譲って大阪へ疎開しました。大阪へ疎開後に徴兵されていた父が戦争で亡くなりました。例にもれず南方洋上で亡くなったようです。父は「わしのような年がいったものが戦争にとられる時代では、もう日本は負ける」ということも言っていたらしいです。その通りになりましたね。

2 歳とか 3 歳ごろに父親が亡くなっているの、親父がいないのが普通だと思っていました。

父が亡くなった後、母は父の弟と再婚させられました。昔はよくあったみたいです。ただその旦那が朝から晩まで酒を飲んでいるような人で、母の財産のほとんどが酒に消えてしまいました。このままではいけないということで離婚しました。1949 年ぐらいのことです。そして兄弟と母と 4 人で神戸市（吾妻通 6 丁目）に引っ越ししました。

母は父が勤めていた会社が誘ってくれて勤めるようになりました。すごく貧乏ではなかったのですが、生活は苦しかったですね。共同便所、共同炊事所の家で。家は一軒家を半分に、ベニアで仕切ってね。床は傾いていました。初めてタンス買った時には、狭くて入らへん。そういう生活でした。

教会へ

小学校 2 年生くらいに神戸に移ってきました。その年の暮れにクリスマス会を神戸イエス団教会でやるということを知って、なんか面白そうだと思って教会へ行きました。そしたらなんとココアが出たのです。庭に並んで順番にココアをもらう。2 杯目をもらおうと思って、また後ろに並ぶんですよ。もらえるのか、怒られるのかというドキドキした気持ちになりながら。この気持ちは、炊き出しの時に一番後ろ

にイエスが並んでいるという状況そのままですよ。教会に行ったらこんな美味しいものがもらえるのかと思って日曜学校に行き始めました。それからずっと神戸イエス団教会に行っています。受洗は 1960 年、高校 3 年生の時でした。高校を卒業する時に「洗礼を受けなさい」と言われました。キリスト教は勉強してないから受洗できないと断ったら、「生きていく中で、少しずつキリスト教やイエスのことがわかっていくんだから、社会に出る時に受けなさい」と言われました。姉もそのまま教会に通い続けて、青年会なんかをやったりしていました。賀川梅子さん（賀川先生の娘）とも一緒でした。姉は賀川先生から洗礼を受けました。兄は途中で行かなくなりました。僕と姉だけ残っていましたね。

就職

僕は勉強が嫌いだったので、中学を出たらもう働くつもりでした。でも母が「あなたは高校に行きなさい」と言ってくれました。姉とは違う高校を選んで、商業高校を受けました。1 学期の終わりに、先生が「祐村くん、よう頑張ったな」って褒めてくれました。そしたら、450 人いて 400 番だった。めちゃくちゃ成績が悪かった（笑）。あとは結構イタズラをしていました。でも生徒会とかにも関わってました。僕は立候補しないけど、仲間をけしかけて立候補させて、生徒会長をさせるとかね。そういうことが好きでした。

高校を出る時には先生がある会社の就職試験を受けるように勧めてくれました。本当は別に行きたい会社がありましたが、就職担当の先生から「とにかく採用試験に行ってみなさい」と頼まれました。そこまで言われたら断れないし、採用面接を受けることにしました。

試験に通るつもりも採用されるつもりもありませんでした。就職試験では、すぐに退席をお願いして。面接では質問は適当に答えて、常務や専務から「最後に 1 つ、君は何か言うことないか」と聞かれたので、「この会社は将来的にどうなんですか？」と生意気なことを聞きました。「お前何を言うてんねん」と怒られましたね。不採用かなと思っていたら、なんと採用通知が来ました。

入社式の後にすぐ常務がそばへ来て、「うちの会社はな、色々な人を採るんや」と言われました。つまり、できるやつでもきんやつも採るということだったようです。会社で労働組合作ったりもしましたが、それでも好きにさせてくれて。すごく可愛がってもらいましたね。だから、会社を辞めても、僕が賀川記念館バザーの物品を受け取りに行ったら、物品を準備してくれていました。「賀川記念館から祐村って

やつが来たら渡すように」って指示してくれていました。不思議なことで、その常務の奥さんがクリスチャンだったんです。

労働組合結成

その会社はアパレル系でしたが、労働条件が悪いんですよ。僕が採用された時は、株式会社に変わって2年目くらいでした。当時は大学を卒業した洋服屋さんの息子たちばかりでした。いわゆる徒弟制度みたいなのが残っていました。給料に対してあんまり文句言わないし。僕は、「これは変えなあかん」と思いました。そこでふと思ったのが、賀川先生の労働組合の事です。賀川先生の本に「労働者が労働力を提供して、資本家はお金を出していく。これが対等関係」ということが書いてあります。そんなことを知っていたから、僕は会社とちゃんとやり合おうと思って。それで、労働組合を作りました。中之島公会堂を借りて、労働組合集会をしました。そういう中で、やっぱり配置転換されました。だから大阪地裁へ訴えて、裁判して不当労働行為が認められて勝ちました。

配置転換されてから工場でも働いたけど、上司とはたくさん喧嘩しました。仕事の内容や、従業員の福利厚生のこと、パート職員の慰安旅行なんかも提案しました。してもらえないと思ったけど、常務が「よしやろう」と言ってくれましたね。従業員のことをしっかり考えてもらわないといけないと思って色々やりました。これが、賀川先生の気持ちだと思っているんですよ。

賀川記念館へ

その頃にちょうど、ある百貨店の電光掲示板で「神戸の中学校荒れる」という記事を見たんです。当時は子どもたちのことが大きな社会問題となっていました。これはやっぱり子どもと関わる仕事をしたいなと思って。勤めていた会社を5年で辞めました。

実は高校卒業の時に村山盛嗣先生から「賀川記念館を建てる。社会福祉やらんか」と誘われました。でも大学にいくことが条件で、勉強も嫌いだったので断っていました。もう1つは「キリスト教社会福祉」が嫌いだった。自己満足の部分も見えて、「絶対にやらん」と思っていました。でもやっぱり賀川記念館で働きたいと思って村山盛嗣先生に頭を下げました。

賀川記念館で働いて、本当に、いっぱい色んな人と出会って、色んな仕事をさせてもらって、ほんまに良かったと思います。

1つは職名について。当時はずっと賀川記念館主事という肩書でした。名誉が欲しいとかではないのだけど、役所へ行った時、役職によって対応が違うのを感じました。だから村山盛嗣先生に、「然るべき職名をください」と直談判して、副館長という役職をもらいました。

そしてもう1つは、仕事の上で、ちゃんと言うことは言おうとは思いました。たくさん怒られましたけどね。

記念館で働き始めた当時は、長田区の天隣館に住み込みました。長田では色んな人たち、特に肉を扱う方と関わることができました。食肉市場にも連れて行ってもらいました。その後、賀川記念館に移り住みました。記念館に住むことは、メリット、デメリットの両方がありました。メリットは、セツラーとしての働きができたことです。

セツラー

賀川豊彦献身90年の時に作った「イエス団憲章」の中に、賀川豊彦が実践した「settler（地域に生きる人々と共に歩む者）」の精神を引き継ぐ」ということが書いてありますけれど、住むことによってできる仕事があったのではないかと思います。住むことで地域の課題を自分の課題として受け止めることができると思います。賀川先生のその発想が少しずつ自分のものになってきたのかな。

賀川記念館にいたからこそできた役職もあります。公職も含めてたくさん仕事をさせてもらいました。

1つは差別に対する仕事です。賀川記念館で働いていたから神戸市の厚生館（今の隣保館）の運営審議会の委員をさせてもらいました。審議会のメンバーには、大学の先生と運動団体の人がいました。今その大学の先生は今井鎮雄先生（イエス団第4代理事長）の後をついで神戸市の福祉のシンクタンクとなっています。しょっちゅう昔は飲み

歩いていました。運動団体という実践者と、大学の先生という学問の世界の先生の2人に出会い、一緒に色んな仕事をさせてもらいました。

僕が一番印象に残っていることがあります。

当時、部落問題の対応は全て公費で出ていました。ある時地域住民の方から「必要な金額、実費ぐらいはそろそろ負担してもいい」と言われました。施策にも言えることですが、良かれと思ってすることが人を挫けさせることもあるということを学びました。

2つ目は民生委員の仕事です。前任者が辞めて、後任をどうするかを考えたときに、賀川記念館に勤めていたことで依頼されました。当時、福祉の立場からの民生委員はいませんでした。おかげ様でいろんな仕事をさせていただきました。最後は神戸市の民生協議会の理事長の立場から神戸市に対しても色々言わせてもらいました。

例えば、「誰1人も取り残さない 災害対応民生委員」なんて説明もありましたが、「使命を感じてまでね、民生委員になる人なんておらへんで」とはっきり伝えました。災害の時に「災害時要援護者」をすぐ救助するなんてことはできない。負担になることも多いです。だから、民生委員もまず自身の安全、家族の安全の確認した上で、要援護者に対応してください、というふうに変えていきました。

3つ目は人権擁護委員です。これも賀川記念館で差別問題をやっていいたから依頼されたと思います。それも一生懸命させてもらいました。人権擁護委員の仕事に人権擁護相談活動というのがあります。電話相談です。ある時、外国人の方から電話がありました。生活困窮についての相談でした。生活保護に繋がうかと思ったら、オーバーステイでした。神戸の法務局幹部にこのケースの相談をしたら、「オーバーステイがわかるのであれば、犯罪行為だから法務局に報告してください」と言われました。「あんた、何言うとんねん。相談活動を受ける立場の者が通報なんかできるか」と言いました。それ以来、「できたらして欲しい」というふうに変わってきました。

4つ目は保護司の活動です。僕が担当になるのは、高齢者と子どもが多いんですが、子どもたちとも色々ありました。僕もわりと悪かったから、その子どもたちのことも理解できたんだけどね。子どもたちとやりとりをしながら、学んだことも多いですね。

ある時、うちの家の横の公園で、中学生5、6人がたむろしていたことがありました。タバコ吸いながら。だから、ちょっと注意したんです。そしたら、「誰やねんお前は」ってなって。そしたらその内の1人が僕に気付いたみたいで、「やめとき。このおっちゃん、学校の生活カウンセラーや」と。そしたら大人しくなって…。そういう関係性があると色々繋がるね。何もなかったら、多分そこで殴られていたかもしれません。

だから、地域で住んでいるということが、すごく大切だと思いました。神戸市のモデル事業として「スマイルプロジェクト」という学校（小学校、中学校）と地域が一緒にやっていくことを考える組織の委員長をさせてもらいました。途中からは馬場一郎さん（現賀川記念館長）に引き継いでもらいました。

賀川記念館での働きで印象深いのは「ふれあい給食」の事です。これは昭和53（1978）年に、神戸市第1号として始まったものです。当時老人クラブの会長さんの旦那さんが亡くなって、「1人でご飯食べるのは虚しいな」というので、「じゃあみんなでご飯を食べよう」ということがきっかけになって始まりました。友愛幼児園の部屋と調理室を借りて始めました。準備は子ども会の中学生、料理を作るのは親世代。食べに来るのは、おばあちゃん・おじいちゃん世代。3世代集まってやりました。そうこうしている間に、近所に空いている土地を見つけたので、老人憩いの家を作ってほしいと神戸市に交渉しました。でもダメでした。当時は小学校区に1つだけという決まりでしたから。でも粘り強く交渉したところ、建ててくれることになりました。内装も当時としては画期的な調理室付きの建物。これも当初はダメと言われたんですけど、交渉しているうちに、「モデル事業としてやろう」ということで作ってくれました。

果敢に交渉するということは大事だと思いました。これは村山盛嗣先生から学んだことですね。やっぱり根源的なところからの発想っていうのが大事ななと思っています。「何を大事にするか」ですね。

神戸保育専門学校や真愛ホームでの立ち上げの手伝いをさせてもらいました。あとは杉の子保育園での園長も。杉の子保育園の担当に

なる時には「記念館の仕事は続けさせてください」とお願いしました。賀川記念館の仕事が好きだったのですね。

阪神大震災

記念館にいた時にいちばん残念だったのが、震災の時のことです。賀川記念館で朝から晩までずっと救援活動をしていました。人間の力の虚しさを感じました。

震災の時、飛び起きて作業ジャンパーを着て救援活動に向かいました。でも、僕は杉の子保育園の専任になっていたのです。記念館の職員ではないから、賀川記念館には入れないし、賀川記念館を救援活動の拠点としては使えませんでした。でも担任教師と相談しながら、最低限のできることをしました。屋上のタンクの水を全部放出しましたし、調理室から使える食料などを出したりもしました。

停電していたから、教会のキャロルで使うろうそくを避難所に持って行ったりもしました。本当に暗闇の中の灯だと思いました。暖かいし、明るい。これはすごくよかったです。でも、すでに賀川記念館を退職していたので、救援活動は全然できなかった。それがいまだに残念です。賀川記念館は、緊急時には地域に開放する、そういう役割もあるんじゃないかと思っています。今に活かさないといけない教訓かもしれません。



杉の子保育園の園長だったので、賀川記念館での救援活動を泣く泣く置いて、杉の子保育園に向かいました。行ったら、庭や階段は潰れているようなすごい状況でした。病院も大変な状況でした。病院のソファでは園児が寝ていました。子どもを置いて、保護者が看護、救援の仕事をしていました。この状況を見た時に、「付属の保育園が休んでええのか？」と思って、それですぐに全職員に緊急の出動命令、厳命を出しました。保護者が子どもを置いてまで、一生懸命に救援活動している中で、僕たちは何をしているんだ、と。「頼むから保育しようや」とお願いをして、2泊3日、交代制で保育をしました。

乗合バスのようにルートを決めて、僕が職員の送迎をしました。毎晩のように「なぜこれをするのか」という僕の気持ちを伝えたら、職員みんな「わかりました、やりましょう」と言ってくれました。半年ぐらいてから保護者、お母さんたちからお礼をもらいましたね。「みんなで心を込めてした保育の結果やで」と伝えて職員みんな喜びました。施設長はそういう思い切ったことを言わないといけない時があると思うんです。

賀川記念館の建て替え

2009年の建て替えの際には、今井鎮雄先生が神戸市と交渉してHAT（神戸市中央区脇浜海岸通）に建て替えるという話がありました。僕は反対だったから正直に「HATにはいきたくないです」と言いました。

やっぱりこの場所にあるから意味があると思いましたので。今井鎮雄先生は「これからの賀川記念館は、葺合神戸という地域からもっと世界に発信する必要がある」ということをおっしゃっていました。「HATに移っても新しいニーズもあるし、新しい町づくりができる」と。それでも僕は断固として同じ場所に建て替えて欲しかったのです。結局この場所での建て替えに決まったのですが、結果的に何千万円も捨てたことになりました。

そういう世界に発信するという発想から、ここが1つのミュージアムに変わりました。それまではセツルメント事業で勝負していましたが、新しいこともしないとあかんのかなと思ったりしましたね。

苦勞したこと

一番の苦勞はお金です。

アパレル系から転職した時には、給料が半分くらいになりましたね。笑。まあ、それはいいんだけど、とにかく賀川記念館の運営費が大変でした。建て替えの借金もありましたし。なんとか金儲けをしなければいけないと思いました。今で言えばソーシャルビジネスですよ。

1つはバザーをしました。当時はバザーで最大1日300万円ぐらいの収入がありました。最初は2日間実施していました。でも2日間やると友愛幼稚園での保育に支障が出てきます。だから、1日にしました。企業や地域の団体に賛助広告をお願いして協賛金も集めました。「福祉のために協力してください」だけでなく、お金出す人にも利益が出るようにしないといけないと思いました。

あとはスキーツアーとかも企画して利益を出したこともありましたが、宝くじを企画したこともありました。これは所管庁から断られましたけどね。自販機を置いたりもしました。結構儲かるのですよ。

2つ目はボランティアの確保です。賀川記念館は館長と事務職1人、地域活動のできる職員2名だけでした。だからボランティアの確保はすごく重要でしたね。

土曜の夜には自宅に招いて食事会などをしたりしました。

ボランティア確保のために、高校にも依頼に行ったりしました。

3つ目は、差別をどう考えていくかということです。職員とボランティアで必ず月1回研修会をしていました。最初はグループワークの研究をやっていましたが、途中からは部落問題研究をしながら差別について考えていました。差別に対する感覚の鋭い人間が必要だと思っていました。

4つ目は教会との関係です。福祉施設と教会、あるいは賀川記念館と教会、イエス団と教会。時代が変わっていく中で教会とのつながりをどうするかが難しくなってきましたね。クリスチャンだからいい、クリスチャンだからダメっていうことでもないと思いますが、教会と繋がっていることは大事だと思いますね。

イエスに倣って生きる

イエス団はずっと賀川先生に倣うということをしてきました。ただミッションステートメント2009では、賀川に倣うのではなくイエスに倣うということを明記しました。「イエスに倣う」が一番にくべきだと思いました。そして、イエスに倣った賀川先生がいて、その賀川先生を僕たちが倣っているのだと。

あわせて誰に向けて書いているのかということも課題になって、平易な文章にしようということで、あのミッションステートメント2009ができました。

実は、僕は賀川先生のことを直接知らないのです。たまたま賀川先生が神戸に帰ってきた時に、礼拝の話を聞いたことはあります。でも言葉がわからない。賀川先生がここに住み着いた時に、殴られて全部歯が折れているから言葉が聞き取りづらかったですね。賀川先生の直接のエピソードはあんまりないですけど、4月23日に亡くなられてマスコミの報道が出た時に、「賀川先生はこんなすごい人やった」と感じました。だから、賀川記念館へ来たら賀川先生のことを勉強しないといけないと思って勉強をしました。

賀川先生の中で、好きな言葉は「尻拭いの精神」です。こんな言葉は、普通使いません。でもイエスが弟子の足を洗うという姿のように黙々とすることは大事だと思います。尻拭いっていうのは僕らが1番

しにくいことだと思います。賀川先生は『看護婦崇拝論』で、「看護婦は最も汚いものを最も美しく見せる仕事である」ということを言っています。

もう1つは、「セツルメントは人格交流運動」です。働いている人がただ黙々とそこで働いている。その姿を見て、ちょっとでもあの人の真似したいなと言ってもらえるような働きが人格に触れて、その人が変わっていく。その人の人格に触れることが、セツルメントの働きだということ肝に銘じたいと思います。セツラーという言葉の肝ですね。

公務員にはよく言うのですが、「あなたは確かに通勤してきている。でもそこに住んでいる人の心に合わせて関わっていかない限り、いい仕事にはならない」と伝えます。賀川先生がしたセツラーという働きはやっぱり大事ですね。

それから、「神よ、教会を強めてください。日本に救いを。世界に平和を」という最期のお祈りですね。

イエス団として平和を繋いでいけるのかを考えていかないといけないと思います。少なくともそれを心に留めておいて、目の前のことを1つ、どれだけやっていけるかということを考えています。

職員へのエール

西郷隆盛像は本人じゃないって知っている？実は別人なんだよね。でもみんなあれを西郷隆盛だと思っています。同じように賀川先生も実物を見た人はもう数少ないし、法人の職員にはもういません。本や口伝からしか賀川先生を知ることはできません。知らない中で、賀川先生とイエス団職員と繋がっていけるかということをね、考えないといけないと思います。

1つは、事業を通して、職員たちに伝えることだと思っています。特に施設長を通じて。だから、施設長を見て、「なんやねん」って言われたらいけないと思います。杉の子保育園の時、子どもたちに「園長先生、イエス様ってどんな人」って聞かれたから、「担任の先生を見ていたらわかるかもしれへんよ」って答えた。賀川先生だったらこんなことしたということ、職員がしていたら「そうか」と理解できると思います。

賀川先生の先駆的な取り組みはもう社会のベースになっています。健康保険とか協同組合とか労働組合とか。もう誰も賀川先生のことを意識しなくても行われています。だから、イエス団はもっと賀川先生の実像に近いところにいるといけないと思います。職員みんながそれを意識しながら仕事をしていって、後輩に伝えていくということが大切だと思っています。

もう実際に賀川先生の実像を見ることはできないんですから。イメージを働かして、賀川先生に近づいていくことをしないといけないと思います。特に施設長が自らやるのが大切だと思っています。あとは、法人本部。職員にどう伝えていくのかということに取り組まないといけないと思います。

今でもイエス団の働きは気になっています。「もうちょっとなんとかできんのか」と正直腹が立つこともあります。特に開拓的とか実験的な事業をもうちょっとできないのかなって思います。今みたら、ほとんど認可の事業ばかりです。みんな法整備の整った中でやっています。でも、賀川先生は制度や財政的援助のない中でやった事業がいっぱいあります。

イエス団の全体の中の1つの使命、ミッションとして、そういう仕事に取り組んでいくことはできないかなと思っています。新しい事業、あるいはすでにある施設に新しい付加価値のあるものをつけていくことができないだろうか。「さすがはイエス団やな」と言われることができないかな、と。

何かできると思うですよ。これだけ大きな施設ですから、それを活かさない、と思います。若手でしっかりと何か知恵を出してください。

僕はイエス団の面白いところは、各施設が各地域で、地についた施設であることだと思います。施設が地域にしっかり根を張って仕事しているから。それは強みだと思います。なんやかんや言っても、僕はやっぱりイエス団に育てられたからね。

賀川賞

僕は県とか国とか市からも、賞をいっぱいもらいました。賞状や盾も記念品もありました。でも一番嬉しかったのは、いちばんちっちゃい賀川賞です。これがやっぱり自分にとっては一番嬉しかった。何事にも変えられないくらい。

イエス団賀川記念館にいて、賀川先生を思いながら生きた時に、それをもたらたってというのは、本当に最高に幸せやな。

10の質問

1. 好きな言葉は？

謙遜。聖書の言葉にある「傲慢には軽蔑が伴い、謙遜には知恵が伴う」という箴言の言葉。もう1つは、ラディカルという言葉。常にラディカルでありたいです。

あとは『ハチドリの一とずく』に出てくる言葉ですね。大事な言葉がたくさん書かれていると思います。

2. 嫌いな言葉は？

傲慢です。で、もう1つは、ヘイトスピーチ。聞いていると不快な気持ちになります。

3. 好きな音は？

子どもの笑う声。あとは、オルガンの音。好きな讃美歌を弾く音はすごく好きですね。つい口ずさんでしまいます。

4. 嫌いな音は？

子どもの泣き声です。聞くと辛い気持ちになります。叱って、怒ってね、子ども泣かすっていうのは一番良くないと思います。あとはガラスをひっかくおと。

5. 好きな手触りは？

「赤ちゃんのほっぺ」です。幸福になります。

6. 嫌いな手触りは？

爬虫類。蛇は特にダメですね。昔保育園の遠足でいちご狩りに行ったんですよ。そしたら子どもが「園長先生！蛇いたから捕まえて」っていうの。思い切って尻尾掴んで捕まえましたけど内心は恐々でした。

7. 今の仕事に就いていなかったら？

喫茶店をしたかったです。美味しいコーヒーをドリップでいれるお店。もう1つは車が好きだから、タクシーの運転手かな。

8. なりたくない職業は？

考えたことないです。今までずっといい仕事をさせてもらっていたから。

9. 好きな色は？

赤です。情熱的で心が弾むから。赤い服も好きです。

10. 天国で神様に何と言われたい？

聖書のタラントンの譬えの言葉。「忠実な僕だ。よくやった。少しのものに忠実であったから、多くのものを与えよう」と言われたいです。みんなそれぞれタラントンをいただいているけど、それをいかに有効に使うかを考えないといけない。少しでも他者のために使いたいですね。

お話を聞かせていただいて

インタビュー内容について、事前にお伝えしていましたところ、丁寧に準備をして下さり、インタビューに応じてくださいました。祐村先生の気さくな人柄と熱い信念を持って、自身の思いを伝えながら、組合運動や社会福祉事業、イエス団で、使命感をもって歩んでこられた姿が目目に浮かぶようにお話してくださいました。

祐村さんの働きは、「地域の人」、「施設の利用者」、そして「共に働く職員」に仕える働きだと感じました。まさに「settler（地域に生きる人々と共に歩む者）」の精神そのものです。イエス団の働きを引き継ぐものとして、イエスに倣うものとして、それぞれの地域で、誰と出会い、どう仕えていくのかをもう一度考えなくてはならないと感じました。また、それら様々な功績を讃える地域、団体の賞より賀川賞が一番嬉しかったとおっしゃったことが、祐村先生がイエス団の一時代を支え歩んでこられた道とその思いのすべてのように感じられ、印象的でした。

聞き手：梅村 新 小野 歩

研修会報告



新任職員研修会

2024年3月25日（月）～26日（火）
於：神戸駅前研修センター（SK ホテル内）

新任職員研修会の目的

- ① イエス団の理念を理解し、職員としての使命を考える。
- ② 新しい職場に入っていく準備をする。
- ③ 感じる、考える、気づく、聴く、分かち合うことの大切さを学ぶ。

2023年5月に新型コロナウイルスが5類になったことを受け、新任職員研修も数年ぶりの1泊研修を行うことができました。

この研修では仲間と一緒に考え、他の人の話を聴き、考え方の違いに気付いたり、そのことにより、自分の再発見につながったりすることもあります。また、自分の話に耳を傾けて一生懸命に聴いてもらえる心地よさを感じ、人とつながる事の喜びを感じることもあります。入職にあたって同じように不安な思いを持っている仲間に出会うことで「私だけではないんだ。」と気持ちが軽くなり前向きになれたという声も聞かれました。

この数年間行ってきた1日研修では初めて会った人との距離を縮めることはなかなか難しいことでありました。しかし、泊まりの研修であったことで、懇親会、また、そのあとの自由な時間で交わりを深めていくことができたようです。今回、懇親会で2つゲームをしました。どちらのゲームもリラックスした様子で、周りの人と話をして、笑い合っている姿が印象的でした。特にグループの人に体を預けるゲームでは、相手を信頼して体を前や後ろに傾け、

受ける人は全力で相手を受け止める、ということを繰り返しているうちに、距離が縮まってきているように感じました。そのため、2日目のグループワークでは意見も飛び交い、より深く学ぶことが出来ていたように思いました。

また、この研修で欠かせないのは先輩職員『フェローズ』の存在。グループワークで参加者が話をしやすいようにフォローしたり、新任職員に近い存在の先輩という位置で話をしてくれたりすることで、参加者の不安が安心に変わったという感想もありました。



2日目のセッションでは、ミッションステートメントについて学びの時をもちました。現場での実践を聞く事で、小さくされた人に寄り添い、その人がその人らしく過ごすことができるようにしていることを知りました。

すでに職場に入っている参加者は利用者、そしてその周りの人、地域の人のことを思い浮かべながら、そして4月に入職する参加者は、自分がどう利用者と過ごすのかを想像し、「私のミッションステートメント」を考え、みんなの前で宣言しました。



その時の思いを大切にしながらそれぞれの職場で仕事に励んでおられることでしょう。またみなさんからお話を聞く事を楽しみにしています。

報告：企画委員会 研修担当チーム
神視保育園 園長 植月優子

ブラッシュアップ研修会

2024 年 6 月 14 日（金）～15 日（土）
於：神戸市産業振興センター

「ブラッシュアップ研修報告（原稿）の締め切りが 10 月 11 日ですので、よろしくお願いしますね」というメールに戸惑ってしまった。正直、全く記憶から消えていた。そのメールがなければ、何の焦りもなく穏やかにすごしていたはずが、全く持っの予想外の出来事。6 月におこなわれたことは覚えていても、もうそれ以上は何も出てこない。手帳を開く。確かに 6/14～15 だった。場所は、神戸駅の近く？（神戸市産業振興センター）。あとは、やっぱり何も出てこない。思い出そうとしてもブラッシュアップ研修の事ではなく、出てくるのは、大谷翔平さんのこと。今年の活躍は、野球を知らない人でもどこかのニュースで耳にしたに違いない。

ところで、大谷翔平さんが高校 1 年時に作った「マンダラチャート」（検索 大谷翔平マンダラチャートで見られます）をご存知の方は、どれぐらいいるだろうか？当時高校 1 年生だった時に、「ドラフト 1 位で 8 球団から指名される」という目標を彼は掲げた。そのために今の自分に必要なことをまず、8 つ挙げる。体づくり、コントロール、キレ、メンタル、スピード（160 km）、変化球、人間性、運。更にこの 8 つの項目を達成するために、更に何が必要かを 8 つ考えるというのがマンダラチャートである。8 つのうち、6 つは直接野球に関係のあることが直ぐに分かるが、残りの 2 つ「人間性」と「運」が挙げられている。運から更にどのような 8 つが挙げられているか？「ゴミ拾い」「本を読む」「部屋掃除」「あいさつ」「道具を大切に

に使う」「審判さんへの態度」「プラス思考」「応援される人間になる」。

MS（ミッションステートメント）2009 が掲げる「いのちが大切にされる」「隣り人と共に生きる」「違いを認め合える」「自然が大切にされる」社会をつくりだし、「平和をつくりだす」。そのために、ブラッシュアップ研修においては、参加者一人一人が新たに自分自身の MS2024 を目標に掲げた。もし、ブラッシュアップ研修の記憶は残っていても、書き残した自分だけの MS2024 は残っているはず。今の自分を見つめ直して、そのために必要なことを、どんな些細な事でも一つ一つ丁寧に積み重ねていくことがとても大切なことではないだろうか。それは、感謝であったり、少し勇気をもって言葉にして出すことや、気になる人への声掛けかもしれない。

きっと大谷翔平さんも最初から 50—50（調べてください）を最初から達成しようなんて思ってもみなかったはずだから。



研修報告の提出も終わり、安心してきっていたところ再度メールが届く。予感的中。「ブラッシュアップ研修のねらいとプログラムをどこかに入れたらいいかと思いますので、それだけお願いしてもいいでしょうか。」

確かに、これでは研修の中身が見えてこない…。

あらためて、ブラッシュアップ研修の概要です。

3 つの目的

- ① 今の自分を見つめ、これからの課題を探る
- ② 現場での体験を出し合い、仲間と共有する
- ③ 「イエス団で働くこと」の意味を理解し、深める

これまでの自分を振り返り、今の自分をまず見つめ直す。入職前の意気込みや仕事へのやりがい以上に、思い悩んでいることの方が多いかもしれない。そこから見えてきた課題に対して、自分はこれから、どうアプローチしていくのか？まず、自分で考える。書いてみる。グループのメンバーでそれを共有する。一人では考えつかななくても、同じ悩みを持つ仲間がいる。新たな気づきや視点が得られる。だからこそその集合研修ではないだろうか。たった 2 日

間の研修であるが、この出会いは必要があつて与えられたものであると思う。

また明日から自分たちの職場に戻り、一人一人がこの研修で感じたこと、考えたこと、仲間たちのことを思い出し、その時の気持ちをどうか忘れないで、自分自身のMS2024に向かって歩いていってくれることを祈っております。

報告：企画委員会 研修担当チーム
支援センターあいりん 太田正人

全体主任会

2024年7月5日（金）
於：賀川記念館／オンライン：ハイブリッド開催

第8回全体主任会が、7月5日（金）に行われました。

初めにオンラインで参加の黒田信雄先生より「主任会の意義について」のお話があり、その後、神崎清一理事長による開会のご挨拶がありました。



引き続き、神愛館館長の山下茂雄先生に「イエスに倣っていきる～乳児院の今とこれから～」というテーマで講演していただきました。

乳児院の役割や置かれている状況、これからの乳児院に求められているものといった内容で話が進んでいく中、日頃携わっている保育園の子どもたちと比べて抱えている問題の違いや深さに、改めて考えさせられました。山下先生の「自己責任だけでは太刀打ちできない様々な生きづらさがある」と言われた言葉が心に残りました。

ケースの数に対して明らかに需要が足りていない状況であったり、乳児院で暮らす子どもたちの家庭背景にある「貧困」の問題であったり、親の就労問題から始まり、低学歴、健康問題、借金など様々な要因によって引き起こされる虐待や育児放棄などすべてに繋がっているということ。まさに日本社会全体の問題の縮図を見ているようでした。

また、乳児院の大きな目的として、養育以外に家庭復帰を目指すということでしたが、子どもたちが戻っていく

家庭環境を整えるために保護者支援も大切な役割であつて、その後の見守りが必要だということも言われていました。

そして、入所している子どもや家庭以外に、24時間ケアを必要とする子どもたちの側で、常に寄り添う職員のことにも目が向けられました。

アタッチメントが必要な子どもへの関わりの難しさや、職員間のコミュニケーション、やりがいと自身の生活のバランスなど日々の葛藤の中でどう向き合っているのか、現場の職員の方の貴重なお話を聞くことが出来ました。

今後の乳児院の役割として、退所後の子どもの家庭環境は里親委託を原則とすることや、引き続き小規模グループケアの環境のもと様々な職種が協力し、チームとして包括的にアプローチすること、子育て支援事業として地域全体を支えるということなどを挙げられていました。



講演後に「天国屋カフェ」の美味しいスイーツを頂きながら、グループごとに共有する時間を持ちました。

おもな感想として

- ・ 家庭支援を地域に広げていく重要性。
- ・ 乳児院を取り巻く状況や実際のケースについて等、乳児院のことを知ることができ実りのある時間になった。
- ・ 現場で働く職員の思いを共有できた。

などが出ました。

山下先生のお話の中で「乳児院を知る仲間が増えることは、乳児院の子どもたちの幸せの担保になる」という言葉に感銘を受けました。

様々な施設が集まっているイエス団の仲間同士、このような情報共有や分かち合いが出来る環境にあることに感謝したいと思います。そして、ミッションステートメントにも掲げられている「小さいものと共に生きる」「小さいものの幸せ＝みんなが幸せな社会」という言葉を心に刻み、またそれぞれの場所で自分たちのできる仕事に取り組んでいこうと思いました。

報告：二宮保育園 主任 山本直子

リーダーシップ養成研修会ステップⅠ

2024年9月12日(木)～14日(土)

座学：在日韓国基督教教会館(KCC)

フィールドワーク：生野の街

社会福祉法人愛信福祉会 愛信保育園

社会福祉法人聖和協働福祉会 大阪聖和保育園

NPO法人サンボラム在日コリアン高齢者支援センター大池橋サンボラム

NPO法人うり・そだん デイサービスさらんぱん

NPO法人出発(たびだち)のなかまの会

今年の夏も新型コロナウイルス感染症が流行りました。感染症の不安が絶えない中でも、研修を快く受け入れてくださった愛信保育園、大阪聖和保育園、サンボラム、さらんぱん、出発のなかまの会の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

研修参加者は9名(1名欠席)でした。多くの職員を送り出して下さいました各施設にも感謝です。

例年通り、初日はイエス団理事で聖公会生野センター総主事の呉光現(オクワンヒョン)氏に生野地域(御幸通商店街・コリアンタウンや戦後闇市のあとを残している「鶴橋国際マーケット」)を案内していただきました。お話だけでは感じられない、街に息づく匂いや空気、飛び交う会話、美味しい朝鮮料理など五感を通して「生野の街」を感じました。

在日韓国基督教教会館(KCC)に移動し、呉光現氏から在日朝鮮・韓国人の現在に至るまでの歴史や、生野にお住いの在日2世の李承子(イスンジャ)氏のお話を伺いました。呉光現氏のお話で、在日朝鮮・韓国人への差別がヘイトスピーチのような形になっているが、「ヘイト暴力のピラミッド」(図参照)にあるように、ジェノサイドに近い「暴力行為」のステージまで日本はあることを学びました。参加者のほとんどが知らなかった、または言葉は知っている程度でした。



(出典: Brian Levin, Anti-Defamation League)

ヘイトスピーチは、マイノリティーに属する人々の「人間の尊厳と平等」を傷つけ、恐怖で平穏な生活を奪い、心身の健康、人間関係を破壊し、沈黙させて社会から排除する。と学びました。呉光現氏から「共に生きるとは?」の問いから「知らないことを知っていくこと」、「小さな声に耳を傾けること」、「それぞれを認め合うこと」を学びまし

た。参加者は「知らない事」の恐ろしさも感じてくれたようです。



昨年もお世話になった、在日2世の李承子氏のお話しも伺いました。女性であること、在日朝鮮人であることで学ぶ機会を奪われたオモニ。70歳を過ぎてから夜間学校(オモニハッキョ)で学ぶ機会を得られ、学ぶ喜びを表情に現わして下さる元気な様子から我々が元気をもらうのです。

しかし、長年の差別を受けてきた経験は言葉の端々に表れていました。例えば、「なりきって」という表現。日本人に「なりきって」通名を使い続ける。戦後79年も経った今でも本名を名乗りづらい日本社会。朝鮮半島出身であることで、いわれのない差別を受け続けた歴史。戦争により翻弄されてきた人生は李承子氏個人の責任ではなく、日本国の責任であり、日本国籍を持ち参政権を持つ我々の責任でもあることを痛感させられるお話でした。

2日目は生野の地域課題を自らの課題として施設運営されている方々の現場研修は、私たちイエス団としてもミッションステートメント2009の実践につながる学びとなりました。この出会いの中で、初めて知ることが多く、また今までなぜ知らなかったのか、なぜ知ろうとしなかったのかを悔いる研修でもありました。



3日目の「私のアクションプランをつくる」段階では、現場研修をヒントにそれぞれの施設・事業所の地域へ思いを広げました。

リーダーシップ研修ステップⅠの研修目的は、「ミッションステートメント2009の実現に向けて必要なリーダーシップ能力を高める」です。この研修を通して自らの現場での働きを見直し、各々の施設で何が出来るのか、何をしたいのかを考える良い機会となりました。日頃の業務の忙し

但也有、宿題を持ち帰り、各々の場で再検討、再確認をしながら参加職員だけで取り組むのではなく、施設全体で取り組みMS2009の新たな実現を目指していきたいと思ひます。

ロシアがウクライナへ侵略戦争を始め2年半。イスラエルのカザ地区侵攻(まさにジェノサイド)も収まらず、また新たな戦争としてレバノン、イランとも武力の応酬が始まりました。李承子氏へ個人的に今起きている戦争についてお気持ちを尋ねたところ、即答で「戦争はダメ! あんなひどいこと、なんでするんやろうな?」と怒った表情でおっしゃっていました。

私たちイエス団は、これからもミッションステートメント2009を実践するよう、それぞれの現場で何ができるのかを真剣に考えていく集団でありたいと思ひます。

参加者のアンケートには、研修に参加し良かったという意見がいっぱいありました。ほんの一部ですが記載します。今後参加を予定されている職員のみなさんの参考になればと思ひます。

- ◎ 吳光現さんのお話を聞く中で、「「共同」「共生」と簡単に言うが、共に生きてはいるかもしれないが決して共同ではない」という言葉に考えさせられた。ミッションステートメントにもある「隣り人と共に生きる社会をつくりだす」「違いを認め合える社会をつくりだす」という言葉がよぎったが、その言葉の深み・重みを感じさせられた。それを実現するためには、まずは「知る」ということ。そこから始めなければいけないことに、恥ずかしながらそのときに気がついた。
- ◎ 私はリーダーとして自分がしっかりやらないと、と思うことが多かったが、仲間とつながり共に行動していけば良いと思えた。
- ◎ 自分には(社会を)変えていくことは出来ないと、どこか他人ごとのように思っていた自分がいたので、そんなことはないのだと思った。
- ◎ 「知る」ということの大切さを痛感しました。知らなかったこと、気づいていなかったことに気づきより学びを深めていきたい思ひが強くなりました。

報告：企画委員会 研修担当チーム
野の百合保育園 園長 井桁光

2024年度の研修を振り返って

思ひ立って今年わたしは、京都ブロックで大切に行われている沖縄平和研修に参加しました。参加者の中でも最年長。ところが沖縄に行くのは生まれて初めて。

長年研修に送り出す側だったわたしが、そして研修を組み立てる役割をいただいているわたしが、久しぶりに一参加者として沖縄の地を踏んだのです。6月1日、事前学習会からその研修は始まりました。東京の雲柱社からもおふたりの参加がありました。

あの美しい沖縄の海が今どのようなになっているのか、皆さまご存知でしょうか。話にはよく聞いていましたが、実際に見るのは初めてでした。基地建築のため、ジュゴンの餌場が、そしてウミガメの産卵場所が奪われてしまっていました。「その地に行かなければ分からなかったこと」がたくさんありました。そして、研修に参加したからこそ感じたこと、分かったことがたくさんありました。

事前学習会を経て、行く前には「戦雲(いくさふむ)」という映画を観ました。愛隣館では8月に自主上映もされました。

「知らなかった」ではいけないのです。「知ろうとしなければ何も変わらない」。

これがこの研修を通して強く感じたことです。

今年のイエス団の研修も、新任職員研修から始まって、ブラッシュアップ研修、リーダーシップ養成研修Ⅰと続けました。それぞれにフォローアップセッションをもって学びは一旦区切りとなります。そして、そこから新たな一歩を踏み出します。7月に毎年行っている全体主任会は、いつも送り出す側にいて施設を守ってくれている主任が、賀川記念館に集って学び合い、語り合う会です。1年間の労をねぎらい、記念館のおいしいデザートバイキングを味わう良い時でもあります。

それぞれに意味があり、何よりもそこでイエス団の仲間と出会います。

「わたしだけではなかった」と仲間の思ひに気付く新任研修。「これまでの自分を振り返り、またやってみよう」と思えたブラッシュアップ研修。「地域の現状を知り、自分には何ができるのか」と考えに考えたリーダーシップ養成研修Ⅰ。そこでの学びはかけがえのないものでした。

まだ一度も参加したことがない方々にこそ知ってほしいと思ひます。

知らなかったではいけないのです。わたしたちはMS2009を掲げるイエス団の一員だからこそ知る必要があるのです。来年もお待ちしています。是非一緒に学びましょう!

研修で出会った皆さまが笑顔で、喜びをもって日々を過ごされますようにと願ひ、スタッフ一同お祈りしています。

企画委員会 研修担当チーム
チーフ 田村三佳子

多機能型児童発達支援

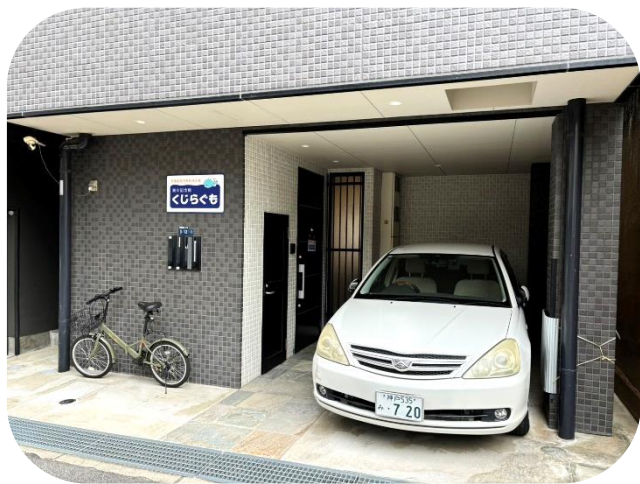
賀川記念館 くじらぐも



賀川記念館 くじらぐもは、2023年4月より、賀川記念館内から移転し、新たな事業所としてリニューアルいたしました。現在30名を超える子ども達が通う療育施設となっています。

『くじらぐも』としての歴史は、実は今からちょうど20年前から始まりました。当時、賀川記念館事業として運営していた「学童保育ひまわり」の中で、見守りが必要な障がいのある児童がおり、保護者からの意向で居場所を作れないかという相談がありました。そのようなニーズがある中、まだ児童の通所支援事業が制度としていない時代に、賀川記念館独自の事業として開始し、2004年から神戸市の日中一時支援事業を通して、くじらぐもがスタートしました。

そこから20年の中で、社会的なニーズも変化し、くじらぐも自体も大きく変化しました。2015年には、放課後等デイサービス事業が始まり、「児童発達支援くっく」の「くじらぐもクラス」として事業を行い、そして現在のくじらぐもへと繋がっています。



家のようにくじらぐもの外観
みんな「ただいま！」と帰ってきます！

そして今回の移転を機に、もともと地域に根差した事業を多く行ってきた賀川記念館のルーツを継ぐ一つの施設として地域に出て運営することになりました。開始と共に賀川記念館事業の一つとして運営しています。

学童保育からスタートしている流れから、おもに日毎にプログラムがあるというわけではなく、個別支援計画に沿った支援を行っています。小集団での関わり方や、日常生活動作の支援、また保護者支援や児童の心理的支援を中心に実施しています。



地域の催しに合同作品を出しました！

また、毎月隔週土曜日にはイベントを実施し、クッキング・ものづくり・遠足など、普段経験できないような内容を意識し、実施しています。

また特徴の一つとして、賀川記念館につながる吾妻学童保育コーナー（学童ひまわり）との連携や、同法人のこども園や保育園とのつながりの中で地域の子どもを支援し、学校や他施設とのつながりも重視しながらの運営を心掛けています。

現在、移設したことで新たに見えた課題やニーズを受け止め、さらに子ども達が安心して過ごせる居場所、関係を築けるように職員みんな力を合わせて前に進んでいます。

賀川先生の言葉である「セツルメント事業の根本原理は人格交流運動である」という理念を胸に、「賀川記念館くじらぐも」として発展的に進化できるよう頑張っていきたいと考えています。

子どもが少しでも「自分」を大切に、また安心して「人」と関われる居場所となれるよう、これからも運営して行きます。



現場管理担当
藤井 航



普段過ごしている「みんなの部屋です！」

施設紹介

瞳保育所

〒761-4661 香川県小豆郡土庄町豊島家浦 2253-2
TEL : 0879-68-2005 FAX : 0879-68-2005



瞳保育所はイエス団の創設者である賀川豊彦の思いが詰まった自然豊かな豊島の地で、土庄町の委託を受けて旧園舎で、1989年4月から保育が始まりました。

2018年には、園舎老朽化が進んだことや土砂災害危険区域に指定されたことから、子ども達が日々安心、安全に過ごせるように、土庄町と検討し、また地域の方々のご支援を得ながら2019年2月に豊島小中学校敷地内に新設され移転いたしました。瞳保育所は、保護者、子ども、職員が共に「おうちみたい」「家族みたい」と感じられる温かい環境です。少人数制のため、子ども同士や保護者同士の絆が深く、地域全体で子育てを支えています。保育所が小中学校の敷地内に位置していることで交流も増え、卒園した子ども達の成長を身近に感じられます。



自然に囲まれた環境では、季節の変化を感じながら散歩を楽しみ、最近では散歩中にたぬきに遭遇し子ども達はとも喜んでいました。

そして、地域の方々との交流も深まっています。子ども達は畑で野菜を育てたり、地域から頂いた食材を使った給食を楽しむことで、地域とのつながりを実感しています。

全員で15名の小規模な保育所では、異年齢の子ども達がきょうだいのように過ごし、困っている友達を助け合う姿が見られます。子ども達が「一緒にあそぼう」と声をかけ、遊びだすと「ぼくも！わたしも！」とみんなが同じあそびをしている、そんな姿を見ているとほっこりとした温



観光協会主催のお餅つき

かさを感じます。
こうした取り組みを通じて、瞳保育所では、島の未来を担う子ども達を温かく見守り、地域全体でその成長を支えています。

自然に囲まれた

環境と、心を育む保育理念を大切にしながら子ども達が心豊かに、確かな力を持って成長できるよう、一人ひとりを受け止めながら保育し、これからも保護者の方、地域の方々と連携を取りながら、育っていく子ども達を共に支え、地域から愛され、信頼される保育所として歩んで参ります。



さつまいもの収穫

<保護者の方から見た瞳保育所>

- ◇ 私は瞳保育所は「温かい場所」だと感じています。一人目、二人目…と子ども達が日々お世話になり、気づけば保育所に通いだして12年。この温かさはいつの時も同じです。優しい先生方に、穏やかな日常。子ども達だけではなく、保護者の悩みに寄り添ってくれる事もありとても心強いです。これからも、少人数であることの強みに、みんなが心豊かに過ごせる場所であり続けてほしいと思っています。
- ◇ 瞳保育所はとても学びの深い保育所だと思います。畑では野菜を植え育て収穫しみんなで食べたり、地域の行事に参加し地域の人と触れ合ったり、田舎だからできる家庭、地域、自然との距離の近さが子ども達にとって刺激のある日々となっています。また、子ども達が、楽しく沢山の物や人や出来事に触れて学んで考える時間があるという事は、すごく貴重な時間で保護者として有りがたく感じております。小規模だからこそ、一人ひとりの子ども達や家庭に寄り添って頂けることで、安心して保育所に預ける事ができ、また、先生方の沢山の愛情のおかげで子ども達が素直に真っすぐくすくすと成長しているのを実感します。

以上が保護者の方が思われる瞳保育所を紹介させていただきました。

<職員募集について>

家族のように温かく、一人ひとりの子ども達の個性や可能性を大切に育む場所。子どもたちの瞳に映る無限の世界を共に広げていく仲間を募集しています！

◎島暮らしに興味がある方 ◎少人数でのふれあいを大切にしたい方 ◎自然あふれる田舎生活に憧れる人
◎海に見える島での暮らしに興味がある方
こんな方がおられましたら、自薦他薦は問いません。是非紹介していただきたいと思います。

園長 三谷 恭子

港島児童館

〒650-0046 神戸市中央区港島中町 2-3-3
TEL FAX 078-303-3266

港島児童館は神戸市のポートアイランドの中にあります。1985年に開設し、2018年度に神戸市からイエス団に委託され今現在に至っています。ポートアイランドは集合住宅がたくさんあり、唯一の小学校、中学校は小中一貫教育の学校です。近隣には公立の幼稚園もあり地域との繋がりが深い場所になっています。児童館もその一角として乳幼児親子から小学校、中高生の子ども達が自由に利用できる場所として提供しています。

少子化が進む中で近年の課題として、児童館という場所が子育て世代の心のよりどころになるように工夫が求められています。「児童館って楽しい」、「児童館に来て良かった」と思って頂けるようこれからも考えていきたいです。

以下児童館で行っている取り組みの一部を紹介します。

親子館事業

港島児童館では、主に月曜日から土曜日の午前中に乳幼児親子が遊べる時間を作っています。乳幼児用のおもちゃを用意して自由に遊び、職員と一緒に体操、手遊び、工作などをする時間も設けています。保護者の中で子育て相談に来られる方もおられます。

子どもの成長は喜ばしいことで、楽しいこともいっぱいあります。でも時には不安になること、悩むことも出てきます。職員や保護者同士が話をすることによって、悩みやストレスが少しでも緩和し、心の栄養がとれるように力になればと思います。親子館事業はこれからも大切にしていきたいです。



新聞シャワー!!

学童保育事業

「ただいま～今日のおやつ何?」「今日ドッチボールできる?」と学校を終えて来館すると、学童保育児童の元気な声が部屋いっぱいに響きます。そして家庭と同じように職員も「おかえり」と子ども達を迎えます。学童保育ではおやつを食べ、宿題をする時間を設け、自由遊びや児童館の行事などに参加して過ごします。

数年前から共働き世代も増え、港島児童館でも利用者は多くなっています。1年生から6年生までの児童が登録していて2024年9月現在、154人が在籍しています。

学童保育では一人ひとりが好きなことを見つけ創造力を養い、思いやりを持って人と接する心を身につけて欲しいと思います。



カプラ楽しいね



フラ板工作をしています

地域交流事業

港島には外国にルーツを持つ方が多くお住まいになっており、児童館にも多くの子ども達が来ています。そこで児童館では地域交流事業として「MINATOJIMA KIDS 学習クラブ」と称して、外国にルーツがある子ども達の学習支援を行っています。「外国にルーツを持つ児童のための学習支援学校ボランティア研究会（学博会）」から講師、ボランティアを派遣していただき、平均10名の子どもたちの学校での学習、また日本語の学習を進めています。学習支援だけに留まらず、子どもたちの居場所として、学校と連携しながら進めています。



MINATOJIMA KIDS 学習クラブ

施設長 花房 奈子

イエス団の輪っ



社会福祉法人・学校法人イエス団理事長
神崎 清一さん

「若者は幻を見、老人は夢を見る」

新約聖書 使徒言行録 第2章17節

今日、私たちは世界的規模の気候変動による厳しい暑さ、激しい雨、そして地震を始めとした大きな変化や災害に向き合うことを余儀なくされています。

また、私たちは多様な価値観を認め合う社会を目指しながら、社会は分断、紛争を繰り返し産み出し、「平和」と思われる国や地域においても経済的貧困のみならず、様々な差別、社会や他者との関係をつくることや自分自身を肯定する事が難しい人など、生きづらさを感じている人々の悲鳴が聞こえてきます。

私は、イエス団に関わらせて頂く中で、賀川豊彦先生、ならびに、その時代・地域で共に尊き働きをされてこられた先達のご功績の一端を、折々に学ばせて頂く機会を得られましたことに感謝しています。

聖書に「若者は幻を見、老人は夢を見る」という箇所があります。

この「幻」というのは、すぐに消えてしまうものという意味ではなく、「Vision」であり、「展望」であるとされています。つまり、若者たちが「これから私たちはどうしていこうか」というビジョンをしっかりと持っているか、持ち得る社会であるのか。

「老人は夢を見る」ということは、若者たちがビジョンをしっかりと持ちえて、安心して若者に委ねることができるから夢を見ることができ、若者が未来を作っていくからこそ、つまり「若者に幻がある」からこそ「老人が夢を見る」ことができると、私はこれまで聖書から教えられました。

そして、若者と老人が共に尊い存在として暮らしていることが前提となります。

私たちイエス団の使命であり願いは、まさに「みんな幸せ」である福祉社会を創り出すことで、「その幸せを達成するため」に、社会福祉の働きをスタッフのお一人おひとりが、それぞれの現場であり職場で、真摯に向かいあっておられます。

小さくされた人に寄り添うことで、お互いが幻や夢を持つことができることに繋がるものと確信しています。

それは各施設の報告から、園児や利用者の皆様の笑顔か

ら伺え、私たちの喜びとなっています。

日本では、経済状況の不安も叫ばれて久しいですが、賀川先生の「人々の助け合いの組織づくりの線上にあるべき国政、施策」が、今こそ求められているのではないのでしょうか。

すべての人が大切にされ、認めあうことが友愛であると考えています。誰もが安心して生きることができ、生きやすい社会を創出する事が求められ、福祉社会を創り出すことこそが、豊かな経済の発展を生みだしえる可能性があることを、役員の一人として経験させて頂くなかで気づかされました。

「あなたには明確なビジョンがありますか？」このことを自問自答しつつ、小さき者ではありますが、ひとつでもお役目が果たせるようにと、そして「夢」を見ることができればと願うものであります。

すべての方に感謝いたします。イエス・キリストに倣って働きを成すイエス団の事業がまもられていますことに感謝いたします。

今回は、新たに理事会に加わっていただきました上杉徹理事に託させていただきます。



大阪ブロック ガーデンエル 総谷 亜弓さん

「15年目を振り返って」

この度ガーデンロイさんよりバトンを受け取りました。東大阪市にある乳児院ガーデンエルの総谷亜弓です。私はガーデンエルで働き始めて15年目になります。

ガーデンエルは1ホーム5～6人の小規模グループで、赤ちゃんホーム、1歳以上の子ども（措置）2ホーム、一時保護ホームに分かれて生活しています。

以前は措置の子どもと、一時保護の子どもを分けておらず、措置ホームで一時保護の子どもも生活していました。

一時保護の子どもは入所期間が短いこともあり、子どもの入れ替わりが激しく、子ども達が落ち着かない状況でした。一時保護ホームを2022年度から取り入れ、子ども達が分かれて生活するようになってからは、措置ホームの子ども達も落ち着いて過ごせるようになりました。一時保護ホームの子ども達もホームの職員にしっかりと甘えることが出来るようになりました。

ガーデンエルは個別担当制をとっており、私は新卒で初めて11ヶ月の子どもの担当を持ちました。新卒だったのもあり、どのように関わってよいのかもわからず、先輩方の関わり方を見たり、聞いたりしながら関わりました。

特に、イヤイヤ期にはどのように関わって良いのか悩み苦労しました。でも、その子が大きくなり、アフターケア等でガーデンエルに来て、一緒に小さい時のアルバムを見る機会があり、その子どもとこんな時期もあったなと笑い

話や思い出を語り合うと、改めて今まで続けて来て良かった、子どもの成長を見守れるやりがいのある仕事だと思えます。子ども一人ひとりと愛着関係を築き、成長を見守れることが私にとって長く続けられる秘訣なのかなと思います。私が初めて担当をもって関わり方に苦労した時、頼れるのが先輩方や経験のある方達だったので、今現在、自分が後輩にアドバイスをする立場にもなり、後輩の話を聞き、自分が苦労したことを伝えていけたらと思います。

今は2歳児の担当もっていますが、自分も子ども達と関わる中で、子ども一人ひとりが違い、未だにどのように関わって良いかわからない事があるので、ホームの職員同士で話し合い、子どもにとってより良い関わり方を話す機会をたくさん作ることが大切だと思っています。わからない事、苦労している事は、一人で考えずに共有することが、この仕事にとって、大切な事だと改めて学びました。

最後になりましたが、今後も子ども達一人ひとりと、どのように愛着関係を作れるかを考え、子ども達に良い養育を提供していけたらと、初心忘れず、かわかりを大切にしていきたいです。

今回は、みなべ愛之園こども園さんにバトンをお渡ししたいと思います。よろしくお願いします。



兵庫・東兵庫ブロック 杉の子保育園 おおすみ ちか 大角 知香さん
「出会いをつなぐに」

この度、甲子園二葉幼稚園さんよりバトンを受け取りました、杉の子保育園の大角知香です。杉の子保育園は、神戸市のポートアイランドにある神戸市立医療センター中央市民病院で働く看護師やドクターなど職員のお子さんを預かっている院内保育園です。実は私が育ったのもこのポートアイランドです。中央市民病院は幼い頃から身近で頼りになる場所であり、私も何度もお世話になりました。

就職の際に、杉の子保育園のことを初めて知り、働き始めて23年目になります。自分がお世話になってきた方々の子ども達を預かる仕事に就いたのも、意味があり導かれたものであると感じています。

今年度のはじめに、コロナ禍ではできなかった小学生の親子同園会を開くことができました。保育園に日曜日ごと1年生から6年生まで各学年が集い、私は担任をしていた5年生の同園会に参加しました。

杉の子保育園の子ども達は、院内保育園であるため住んでいる場所もそれぞれ違い、各々が地域の小学校に入学をします。その為、普段からよく会えるわけではありません。特に近年はコロナ禍で、会える機会が減っていました。人が集まることに制限があり、つながりを持ちたくてもなかなかできない。歯痒い思いをしていた方はたくさんいるでしょう。今回、同園会の声掛けをすると、「うれしい！」と

たくさんの反響があり、計画を進めてくれたのも保護者の方々です。

久しぶりの再会でしたが、すぐにあの頃に戻りたくさんの笑顔を見ることができて本当に良かったと感じています。子ども達のみならず、お母さん達がべちゃくちゃとおしゃべりをして、ほっとした表情をしたり大笑いをしたりしていたことがとてもうれしく思います。リラックスして会話を楽しみ、リフレッシュができたのでしょうか。この様子に、こうしてつながる機会がどれだけ必要なことだったかを改めて実感しました。

コロナ禍で会うことは難しかったけれど、連絡を取って近況報告をし合っていた方もいました。やっぱり会って顔を合わせるのが一番ですね。保護者の方々は、子育てをする中で、誰かとつながりたいと意識せぬうちに感じているように思います。人とのつながりが希薄な時代だからこそ、コミュニケーションのとれる関係性が今を生きるすべての人に必要なことであると感じています。保育園での出会いを大切に、一緒に育ち合う仲間となれるようにサポートできれば幸いです。杉の子保育園で子どもを介して人と人が出会い何年も過ごしていくうちに、その人にとってここが居場所となり、心のよりどころであり続ける保育園でいたいと思います。

私自身もイエス団の様々な研修や主任会を通して、施設の方との出会いの中で学ぶことがたくさんあります。そして、交流の中で同じ思いを持っている仲間がいることを感じて、とても心強く励まされる思いです。このつながりを大切にしていきたいと強く願います。

今回は友愛幼児園さんにバトンをつながせていただきました。よろしくお願いします。



四国ブロック 光の子保育園 まつもと まりこ 松本 真理子さん
「イエス団と私」

この度バトンを受け取り、イエス団の一員として光の子保育園でのこれまでをふり返る機会を頂きました。改めてふり返り入職して25年目という年数に驚いています。

光の子保育園との出会いはそこからさらに遡ること2年、子どもを預かっていただく保護者としてでした。当時、資格習得のため学校へ通うことが決まり、とある公立保育所へ問い合わせをしたところ「うちでは土曜保育していませんので光の子さんへ行ってください。」

まさかのお断りにする思いで電話をし、電話口の「どうぞいらしてください。」の柔らかい口調の声と言葉に救われたのを覚えています。保護者の身で入職に至ったきっかけは、卒業の年に前園長の絢先生から「今度赤ちゃん増やすのに看護師がいるからあなたきてくれない？」とお誘い頂いたことでした。いろんな不安がありました。まず資格試験の可否がでていなかったこと。合格していても看護師経験もなく、ましてやそれまでいなかった看護師のポジション。キリスト教保育についても我が子や行事を通して讃美歌やお祈りするんだよね、クリスマスやイースターの日

を大事にするんだよね…くらいの認識でしたし、よそ様のお子さん預かるなんて…と。しかしながら我が子を夜おいて夜勤をしたくなかったこと、一緒に通えるところに惹かれたのが正直な理由で、志高くというわけでは全くありませんでした。たまたまのタイミング、縁があったんだなと思っていました、学びを経て導かれた、選ばれたのだな、と思えるようになりました。

手さぐりからの出発、しんどいこと、壁にぶつかること、たくさんありました。プライベートでも子育て、現在は介護をしながらこんなにも長く勤める事ができているのは、都度助けて下さる園長先生をはじめ諸先生方のおかげです。未熟な私を必要としてくれることに感謝しています。

絢先生は引退されるまでほんの数年しか一緒に過ごすことはできませんでしたが、忘れられない思い出があります。歓送迎会のホテルのロビーでお話する機会があり、身の上話を聞かれお話をさせて頂いた際「いっぱい泣いたのね。」とかけてくれた一言です。心にかぶっていた鎧がはがれポロポロ泣いてしまいました。

入職し、新任研修からはじまり様々な研修や、道郎先生の聖書学習、現園長の信雄先生からイエスに倣って生きること、賀川精神など学びを深めてきて「こういうことなんだな」と、絢先生が体現されていたことに気付きました。そして、これが園長先生（信雄先生）がいう『光の子らしさ』ではないかと。

園長先生は毎年光の子らしさについて話して下さいます。「大人になった卒園児さんやその家族の方から、光の子保育園は変わらない。って言うてもらえる。人は変わっている、でも光の子らしさの変わらない職員集団であってほしい」と。

自分は絢先生のように心の奥にまで寄り添えているだろうか。光の子らしくいられているだろうか。目の前の子ども達、保護者さんも、同僚も平気な顔をしてしんどい思いを抱えていたり、しんどい思いをしてきたかもしれない。全ては分からなくても汲んで寄り添える人でありたい、光の子らしさの変わらない職員の一員でありたいと改めて思うとともに、日々追われ土地柄やコロナもあり、なかなか交流できておらず、自園のことだけになりがちでしたが、イエス団の仲間がたくさんいることを思い出すことができました。

この機会を頂けたことに感謝しつつ、次は神愛館さんにバトンをお願いしたいと思います。



京都ブロック 野の百合保育園 なかがわ ともき 中川 智貴さん

「インクルーシブ保育ってなあ～に？」

野の百合保育園で4歳児の担任をしている中川智貴です。野の百合保育園では空の鳥幼稚園（児童発達支援センター）と併設しており、色々な子どもたちが毎日通っています。

4、5歳児では空の鳥のお友だちとインクルーシブクラス

として過ごしていて、その他のクラスも運動会やクリスマス祝会、お礼拝などで一緒に楽しい日々を過ごしています。

園では「インクルーシブ」を大切にしていますが、4年間勤めさせていただいている中で「インクルーシブ」という壮大なテーマに毎日悩みが尽きません。

みなさんは「インクルーシブ」という言葉をどう考えてどう受け止めていますか？障がいのない子ども、障がいのある子ども、様々な子どもたちがいる中で一人ひとりの子どもたちにとって良い保育とは何でしょうか？どちらかと言えばインクルーシブという言葉は障がいのある子どもたちのために…と無意識に考えてしまうことが多いのではないのでしょうか？

私は毎日保育をしている中で大人がインクルーシブという言葉に捉われ過ぎて保育や療育、または子どもたちの力を狭めているのではないかと思います。

実際は大人が考えているほどインクルーシブというのは難しくないので考えています。何故かといえば、すでに子どもたちの中でインクルーシブが出来上がっているからです。子ども同士が関わる中で大人は直観的に物事を考えてしまうが、子どもは直感的にお友だちの気持ちが分かったり、共通の遊びが見つかったり、自然に関わって一緒に楽しんでいたりと、もうインクルーシブという言葉がいらないほどみんなが遊びを通して一緒に楽しんでいます。これが本来のインクルーシブ保育の姿なのではないかと思っています。

3つエピソードがあります。ダウン症のAちゃんがジャングルジムや雲梯に興味があって楽しんでいる様子があります。大人は少しヒヤヒヤしながら見守っていますが、いつからか、なんと！子どもたちが見守ってくれたり、一緒に遊ぶ姿が見られるようになったりしてきました。“私が一緒にいるから先生は大丈夫。”と言ったり、大人が見守るよりもお友だちと一緒にいることでAちゃんはとても楽しそうな表情を浮かべたりしています。

また、ダウン症のBくんは手持ち無沙汰？になると棚に登って電気をパチパチと消す姿があるのですが、最初はみんな“電気が消えた！”“キャー”と言ったり、お友だちがBくんを棚から降ろそうとしてくれたり、とても気になる様子でした。しかし半年経った今では、気にしすぎる様子は無くBくんも気が済んだら止めるという姿に変わり、本当に子どもたちで通じ合っているのだなと感じています。

障がいのないCくんはBくんと何か気が合うのか、屋内外問わず手をつないでいたり、一緒に優しい笑顔でギュッと抱きついたりしています。側から見ていてCくんはBくんということで何か心が満たされているようです。

私が思うインクルーシブとはその子どものために大人が輪を作ってあげるのではなく、その子どもが自分のペースで入りたくなるような輪を子どもたちが自然に作り上げていくことが大切だと思います。

イエス団の他施設でもエピソードにあったような光景があるのではと思います。イエス団の仲間同士でも、もっとインクルーシブ保育やミッションステートメント2009についてお話しできる機会があればいいと思います。これからもよろしく願いいたします。

次号は桃陵乳児保育園にバトンをまわしたいと思います。

「イエス団の輪っ」と題してリレー形式での投稿です。理事・評議員から一人、一般職員は、各ブロックより一人ずつ寄稿して頂きました。14回目にご投稿くださった皆様ありがとうございました。今回のバトン先の方々もよろしく願いいたします。

表紙写真の解説



- ① 【のぞみ保育園】 ちいさな「はる」みつけた(o^-^o)
- ② 【二宮保育園】 「なにしているの？」
- ③ 【馬見労働保育園】 「いらっしゃあいませ〜たこやきはいいかがですか？」
- ④ 【一麦保育園】 「目と目を合わせてコミュニケーション。安心できる場所になりますように。」
- ⑤ 【天使ベビーセンター】 魚の解体を見ました！
魚屋さんがブリの解体を見せてくれました。実際に目の前で大きな魚が解体されていく様子にびっくり!!の子ども達。いのちの繋がりや命を頂いているということを感じながら、神様に感謝して美味しく頂くことができました。
- ⑥ 【甲子園二葉幼稚園】 おいもほり
- ⑦ 【ガーデンロイ】 善意銀行 林間
小学3年生、4年生の子ども達と宿泊行事。初めてのお泊りで楽しみにしている子もいました。
- ⑧ 【みどり野保育園】 新しい園庭にはいつもお花がいっぱいです。
- ⑨ 【港島児童館】 「こいのぼりリレー」
こいのぼりを作ったよ 風に揺られて楽しそう
- ⑩ 【二宮保育園】 やったあ〜イエ〜イ！
- ⑪ 【甲子園二葉幼稚園】 川あそび
- ⑫ 【神視保育園】 仲間と一緒に山登り
- ⑬ 【のぞみ保育園】 なにがみえるかな？
- ⑭ 【聖浄保育園】 青空の下、運動会で3歳児がパラバルーンを楽しみました。
- ⑮ 【一麦保育園】 わらべうた
子ども同士で、普段しているわらべうたが始まりました。きれいな歌声が聞こえてきます。
- ⑯ 【天使保育園】 ガーデン天使訪問
年3回ガーデン天使のおじいちゃん・おばあちゃんと交流をさせて頂いています。嬉しそうなお年寄りを前に張り切る子どもたち。優しさにも、一杯触れさせてもらっています。

NEW 施設長紹介

イエス団報 27号で施設長紹介のページを設けました。その後、新たに施設長に就任された方をご紹介します。

兵庫ブロック

二宮保育園

根口 京子（ねぐち きょうこ） 2024 年度就任



1992 年に入職し、（入職のきっかけは、イエス団報 20 号『イエス団の輪っ』をご一読ください。）杉の子保育園で保育士、主任を経て、2023 年 4 月二宮保育園に副園長として異動、2024 年 4 月園長に就任しました。イエス団で出会った方たちとのつながりを大切にしたいと思っています。若い頃は、スキーやサーフィン、釣りを楽しんでいましたが、今はパン好きが高じておいしいパン屋さん巡りを楽しんでいます。

編集後記

11 月の末、地元の憲法 9 条の会主催の「戦雲（いくさふむ）」の上映会に参加した。監督：三上智恵さん 語り：山里節子さん。冒頭、軍事施設が見える草原で山野節子さんが琉球言葉で歌う「戦雲が見えたよ おそろしい 権力者が憎い」という内容の歌声で、もうすでに胸が痛くなる。有事に備えた国防の名の下、国境地帯である南西諸島に軍事施設を建設し、装備を持ち込み、米軍と共同訓練を行う。その地域に暮らす人々の心を疲弊、分断させたり、有事には多少の島民を犠牲にしたりする。多少って誰の事？TV ではあまり知らされないが、それがこの国の国境で実際に起こっているという事実を目を逸らしてはいけな。基地の入り口で銃を構えて立つ若い自衛隊員に山野節子さんが「銃を降ろしてよ、こっちは丸腰なんだからさ」と静かに語りかけるシーン。命令を出す権力者と、命令に従う隊員、島の平和を守りたいおばあという構図。武力で平和が実現できないことは歴史が物語っている。権力を持つものは正しい選択をしてこの国を導かなければならない。そして憲法 9 条の精神は何があっても守らなければならないと強く思った。今年もイエス団に連なる方々の尊いご協力で、法人の創立記念日にイエス団報 29 号を発行できましたことを心から感謝いたします。2025 年こそは平和な年にしたいですね！